

2012年度研究「谷中再発見——4つの町からみる現在と未来——」

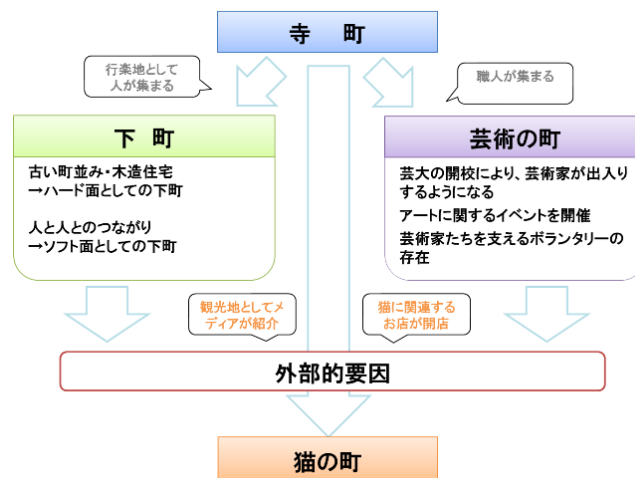


【研究のあらまし】

この研究には、「谷中の町の魅力はどのように形成されたのか?」「マスメディアや観光化などにより、谷中にどのような影響があったのか?」という問題意識を抱いた13名の学生が取り組みました。「寺町」「下町」「芸術の町」「猫の町」という4つ町の顔を切り口として、台東区谷中のまちづくりを調査・研究しました。

谷中で1年間にわたって文献研究やインタビュー調査を行った結果、谷中の持つ多彩な町の顔は、寺町を基盤にして過去の歴史や文化を継承しつつ、地域内部の人やモノ・情報といった地域資源と、マスメディアや地域外部のさまざまなファクターとの相互作用によって生まれてきたことがわかりました。

図1 谷中の4つの町の顔の形成プロセス



【報告書ストーリー】

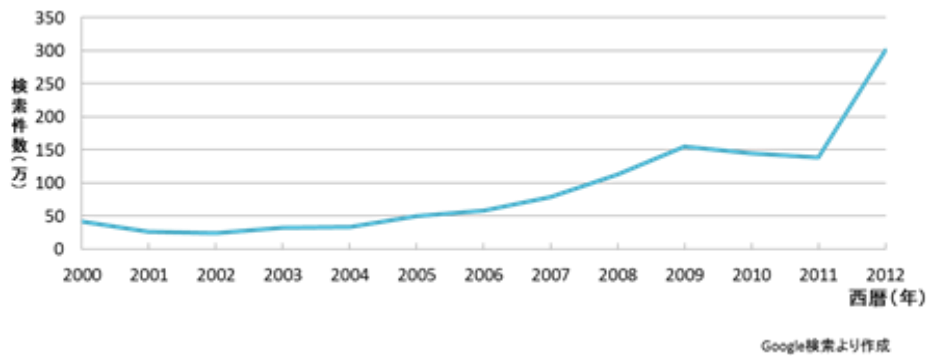
本ゼミの2011年度の研究で、谷中には「寺町」「下町」「芸術の町」「猫の町」の4つの顔があることが見えてきました。この結果を踏まえ、2012年度研究は町の魅力を探りました。

研究アプローチとしては、谷中の町に関わる人々を内部/外部の2種類に分けて考えることにしました。その上で、インタビュー調査や文献研究を中心に、谷中内部でまちづくりを担ってきた人びととその関係や、外から谷中を報じたメディアのあり方を研究しました。

1. 外部メディアが谷中をどのように報じてきたか？—メディアと谷中の関係

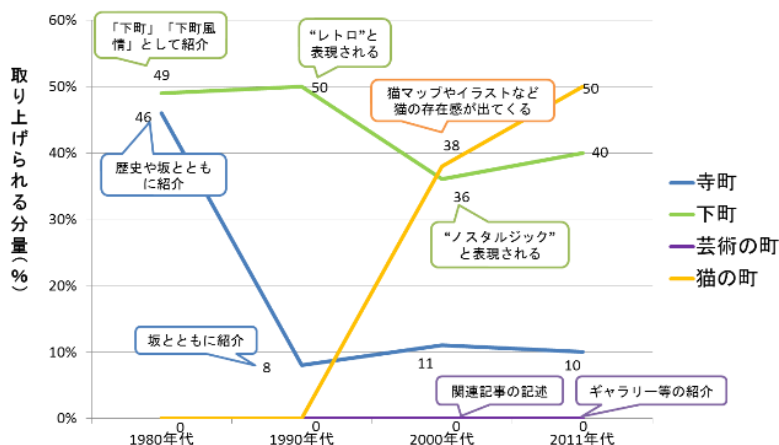
まず、谷中がどのように報じられてきたかを明らかにするため、雑誌やインターネットをはじめとしたメディアを分析しました（注1）。その結果、谷中のまちづくりとメディアが密接に関わっていることがわかりました。

図2 インターネット上の「谷中」検索数の推移



谷中が外部メディアの注目を集めたきっかけの1つが、1980年代に界隈の有志によって創刊された地域雑誌『谷中・根津・千駄木（通称：谷根千）』です。それ以来、特に図2にあるように2000年代後半以降はインターネットやブログの普及もあり、谷中に対する注目が高まっています。その背景には、メディアが谷中の内と外をつなぐ媒体としてはたらき、さまざまな町の顔を見出してきたことがありました。

図3 メディアによるイメージの推移



外部メディアの報じ方を見てみると、図 3 のように当初はまち歩きのフィールドとして「寺町」の側面が取り上げられていましたが、やがて「下町」や「猫の町」という記述が増えています。年を追うごとに町のイメージが変化し、世間が谷中に対してどのようなイメージを抱いていたかを見ることができます。

2.谷中そのものはどのように変化してきたか？—4つの町の顔の生成

続いて、谷中を4つの町それぞれの町の顔、イメージ、場所性がどのように生まれてきたのかを分析しました。

①「寺町」

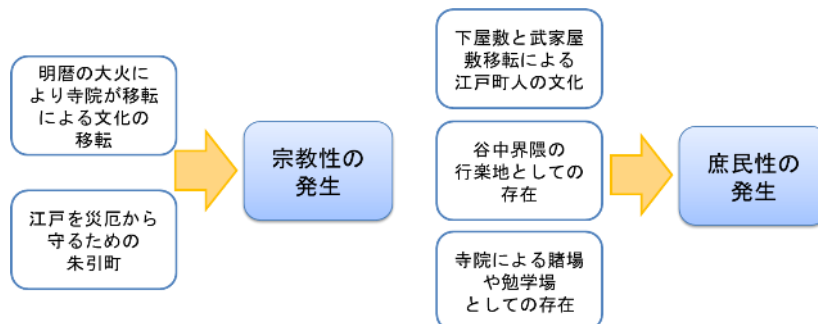
1657年の明暦の大火をきっかけに谷中には数多くの寺院が移転し、今でも80以上の社寺が現存しています。江戸時代の谷中は、外部から多くの参拝客が訪れる行楽地の1つでした。

写真 1 三崎坂の地域共生型マンションと寺院



その結果、図 4 にあるように、この地は人々にとって神や仏に接する神聖な場所であると同時に、俗世を楽しむ行楽地という2つの意味を兼ねていました。いわば“宗教性”と“庶民性”が混在した非日常空間と言えます。「聖」と「俗」の相互作用によって生まれた絶妙な“中立性”が「寺町」としての谷中の特徴であると私たちは考えています。

図 4 宗教性と庶民性の発生



寺院の修理に携わる大工や石屋などの職人が多く住み着くようになったことは、後で述べるように「芸術の町」にも影響を及ぼします。また、行楽地としての活気ある町の姿は後に「下町」へとつながるなど、「寺町」こそが谷中の町の基盤であるといえ、町の人々の努力によって、時代を超えて守り、継承されてきた伝統・文化そのものなのです。

②「下町」

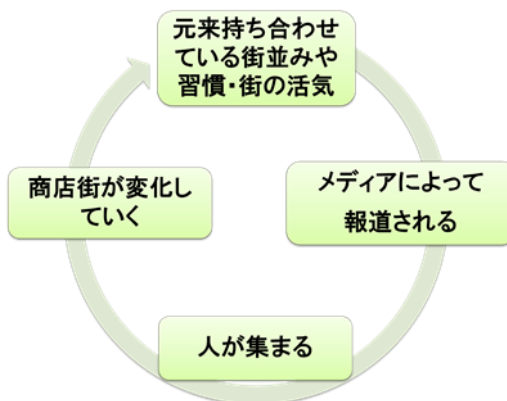
「下町」を考えるにあたり、私たちは谷中銀座商店街に注目しました。かつて超近隣型商店街だった谷中銀座商店街は、現在では「下町」商店街として多くの観光客が訪れています。入口のアーケードや木製看板などのレトロな町並みは「下町」を彷彿とさせます。同時に、商店街の対面販売などは、単なる金銭と商品の交換だけでなく、人と人とのふれあいにともなう温かさを感じさせてくれます。

写真 2 谷中銀座商店街入り口と店舗の木製看板



歴史的な街並みやレトロな演出に加え、谷中に昔から残る挨拶の習慣なども、訪れる人に「下町」を感じさせ、そのイメージ生成に大きく関係していると思われます。実は、谷中の「下町」というイメージは誰かが意図して生み出したものではありませんでした。むしろ、図 5 に示すように「下町」イメージをもって訪れる観光客の期待に応えようとする外（観光客・メディア）と内（店・商店街）の相互作用から、「下町」としての谷中の顔が生まれてきたと考えられます。

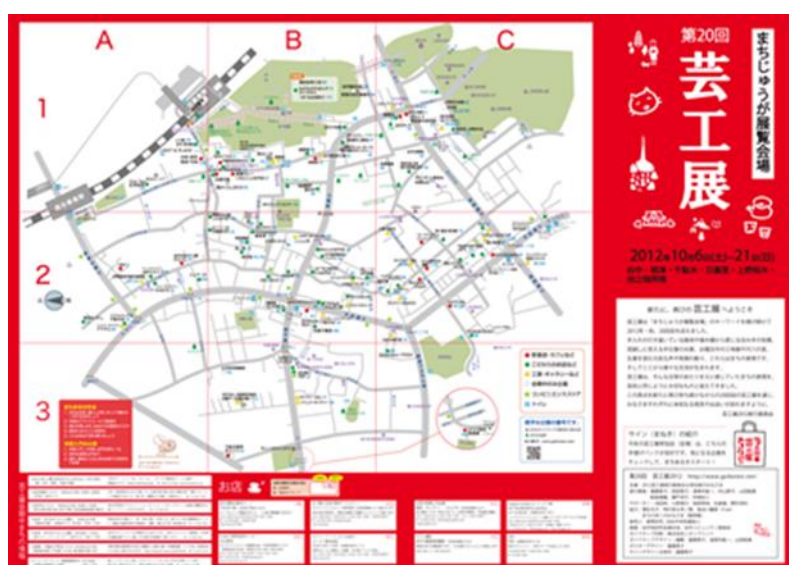
図 5 「下町」形成の循環



③「芸術の町」

谷中では数多くのギャラリーやアーティストが営むグッズ店が軒を連ねているほか、芸術イベントなども盛んです。元来、寺町に関わった職人たちが暮らす町であったことに加え、1978年に東京芸術学校（現・東京芸術大学）が開校したことで画家や彫刻家らが谷中に居を構えました。上野の森にほど近い谷中には、昭和の時代から芸大出身者だけでなくアーティストたちが集まり、今では近代芸術文化が花開く町へと変化しました。art-link や芸工展（図 6）などのアート・イベントは芸術の切り口からまちづくりを展開する動きです。谷中の芸術活動で着目すべき点としては、アーティストだけではなく、地域の人々がそれ支えていることです。私たちの研究では、表現を楽しむアーティストたちの気風と、それを支えるボランティアなネットワークが偶然にも「芸術の町」を作り上げたことが分かりました。

図 6 芸工展 2012 マップ



(芸工展HPより取得)

④「猫の町」

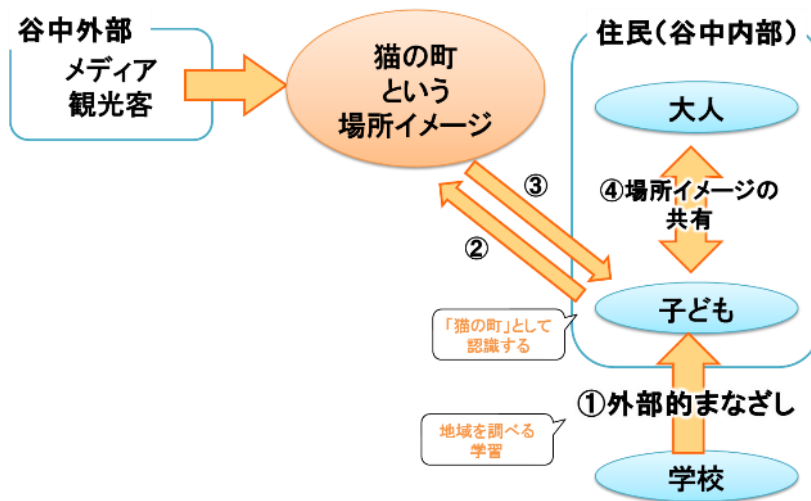
私たちの 2011 年度の研究では、「猫の町」という谷中の新たな顔は、メディアをはじめとした外的要因によって作られたものであり、谷中の内部では猫に対しての関心はあまり高いとは言えないことがわかりました。しかし、2012 年度研究では谷中小学校の児童や彼らが取り組んだミュージカル（注 2）に注目することで、大人と違って子どもたちは谷中を「猫の町」として認識していることがわかりました（注 3）。

写真3 小学生インタビューの様子



図7にあるように、小学校での学びなどを通じて地域を客観的に見つめる子どものまなざしは、猫たちの姿を谷中の町の特徴と捉えていたのです。これまで猫に関心のなかった大人たちも、子どもたちと触れ合うことで「猫の町」というイメージを共有し、“谷中＝猫の町”と考えることができるようになります。また、谷中にはPTAや町会をはじめとした強い地域のつながりがあることも明らかとなりました。これらを結びあわせることができれば、私たちの2011年度研究で明らかになった猫による糞尿トラブルなどを解決する地域猫活動がスムーズに展開し、観光客だけではなく、住民にとっても猫と共生できる「猫の町」を作り上げることができるのではないかと考えられます。

図7 子どものまなざしと「猫の町」イメージの発展



3.まとめ

冒頭の図1に示したように、この研究によって谷中における4つの町の形成は「寺町」に由来するものであることが分かりました。

それぞれの町に焦点を当てて考えてみると、どれも谷中の内に存在する伝統や習慣を大切に、守るだけでなく、メディアや観光客などの外の要素と関わりを持つことにより形成されていることが明らかになりました。それぞれの町の形成要素を図で表すと以下の図8～11になります。

図8 「寺町」の形成とその要素

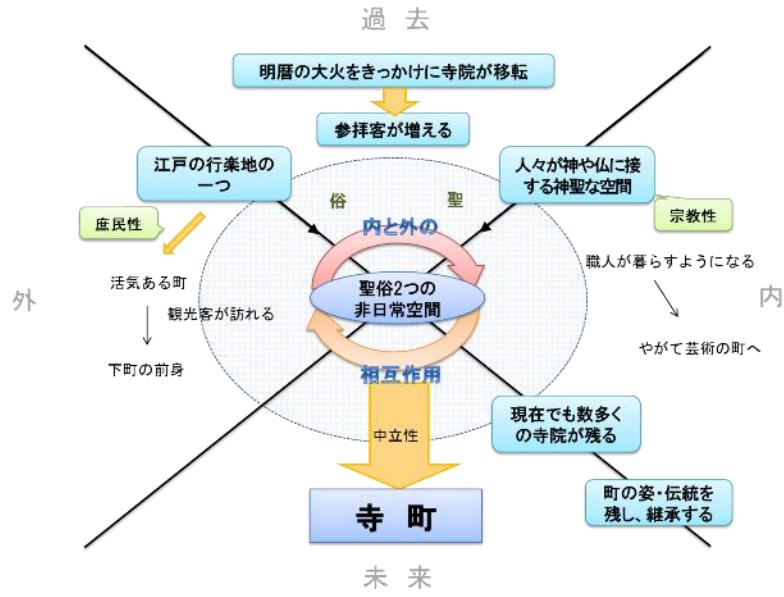


図9 「下町」の形成とその構成要素

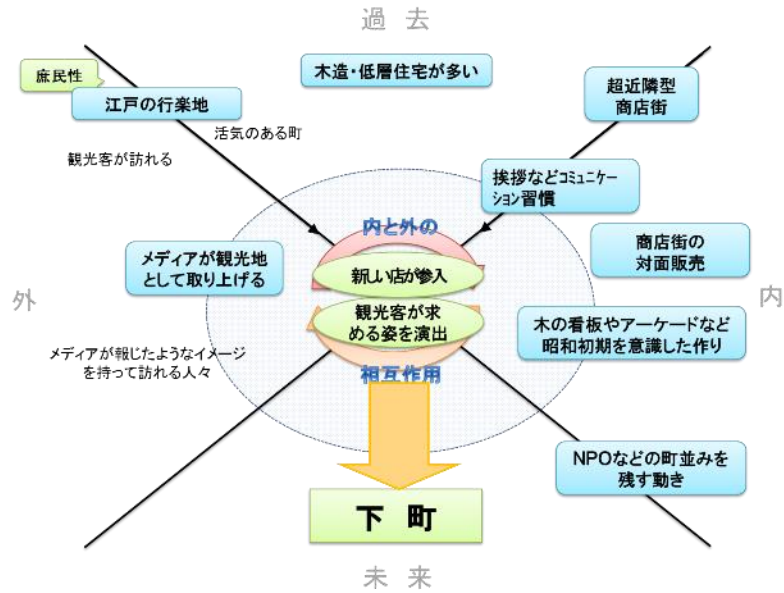


図10 「芸術の町」の形成要素

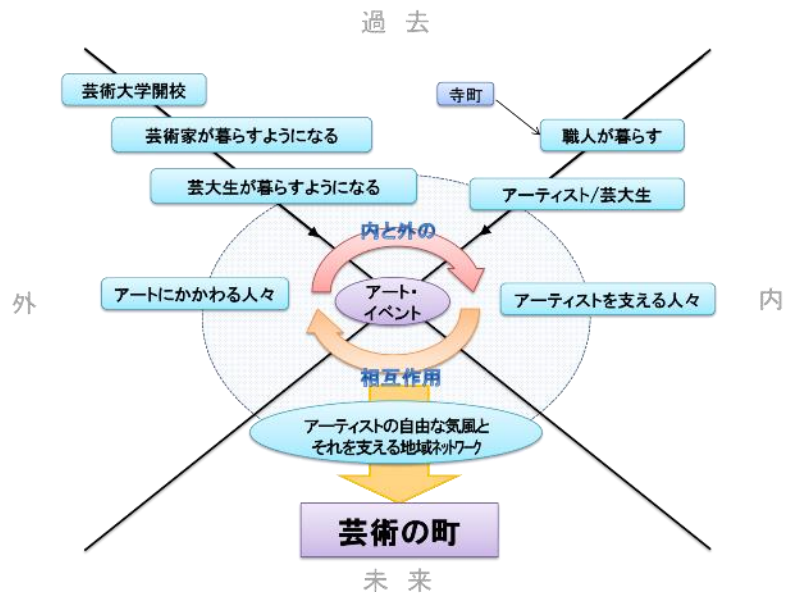
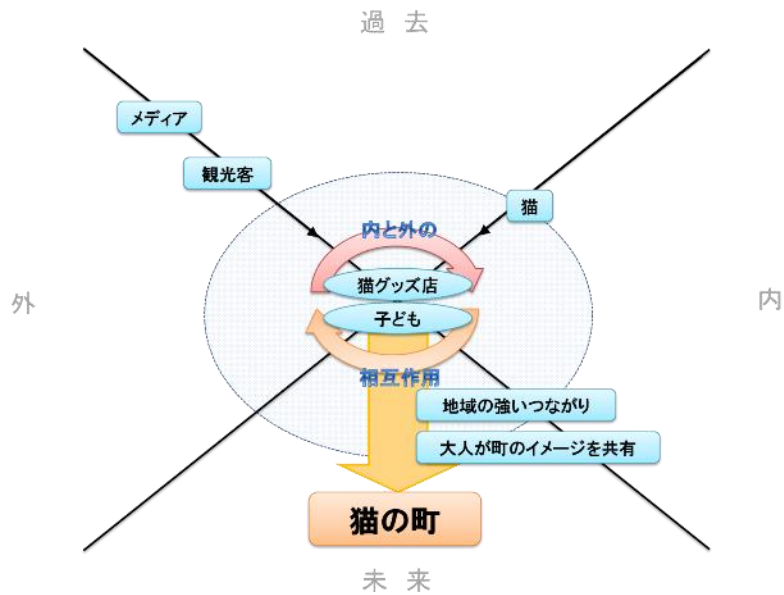


図11 「猫の町」の形成要素



【終わりに】

これらの図が示すように、谷中が持つ町の魅力は、谷中が元来もつ歴史や文化、そして人のつながりなどの資源と外部のさまざまなファクターが関わり合うことで生まれたものであることがわかりました。さらに、谷中は地域コミュニティの力が強く、町内会や商店街が元気な一方で、まちづくり団体などの新しいグループ活動やイベント開催も盛んであることがわかりました。

これからも、谷中の町は外部の期待によってその街並みを変化させ、新しい姿を見せ続けるでしょう。しかし、それは単に古い町の顔が淘汰されることを意味するものではありません。歴史の歩みとともにさま

ざまな顔を見せてきた谷中は、時代・社会のあり方に応じてその魅力を”再発見”し、新しい表情を作り替えることができる町なのです。

(注1) 観光雑誌に絞り、谷中がどのような町と紹介されているのか傾向を見ました。過去30年を振り返り、“谷中”という記述のあった雑誌を対象にしました。

(注2) 2012年度は谷中小学校創立110周年ということもあり、記念事業として谷中を舞台としたミュージカル「雲の上にはいつも青空」に子どもたちが取り組みました。

(注3) 谷中の町について勉強する授業を通して、谷中に住んでいながらも自分たちの町を客観的に見るといった「内なる外」といった独特の視点が培われていることが要因と考えられます。

このページの研究内容についてのお問い合わせは、木下ゼミ（日本大学文理学部社会学科「社会学演習」）
hitoneko.since2012@live.jp までお問い合わせください。